

# 大名領国の經濟に関する二・三の問題

——大友氏を中心として——

外 山 幹 夫

## 〔目 次〕

はしがき

### 一、大友氏の収取体制

#### Ⅰ 段錢・間別錢

#### Ⅱ 雜公事その他

#### Ⅲ 貫高制と軍役

### 二、直轄領の性格とその意義

#### Ⅰ 城領の問題

#### Ⅱ 直轄領の成立と分布

#### Ⅲ 直轄領の構造とこれよりの収取

### 三、市場統制と産業保護の問題

まとめ

(以上)

## はしがき

およそ合法的ないし、非合法的な手段を通じて出現成立した大名権力は、その体制の確立維持のため、独自の個別的な支配方式を施行している。

いま大名の領国經濟についてみると、それ自身多くの問題を含むことはいうまでもない。ここではその収取体制はいかなる方式に

大名領国の經濟に関する二・三の問題 (外山)

よっているか、そしてその直轄領は大名にとっていかなる性格と機能果しているか、また領国内の産業經濟と大名の対応のしかた等々の点について、豊後大友氏の領国支配を素材として、これを検してみようというのがその目的とするところである。

### 一、大友氏の収取体制

#### (Ⅰ) 段錢・間別錢

大名領国の収取方式が、その直轄領はともかく、一般に土地からの年貢その他による、安定した体制の確立をみていないことはこれまで指摘されて来た。

こうした中であって、大名領国の財政を支える基本的な収取方式については、最も先端的な後北条氏の場合、いわゆる「一国平均」

の段錢・棟別錢、及び懸錢にあったことが指摘されている。<sup>(1)</sup> 各々独自の収取方式が採られた当時であって、そのあり方はかなり多様なものがあつたことは十分首肯されるが、ここで取り上げようとする豊後大友氏の場合、ここでも同様、「一国平均」の段錢及び間別錢に、わけてもその前者に、主要な基盤が置かれていたといえる。

その収取は、最初朝廷・幕府に対するいわゆる守護出錢として、こうした至上權に基づいて徴していたものが、漸次大友氏独自のいわゆる守護段錢として行なわれるに至ったといえよう。この

際、領国内領主に徴する場合、こうした至上権力に基づくことを名目としつつ、独自の収取目的の達成を計り、一つの体制に高めたといふことができる。

守護大友氏独自の段銭であると、その朝廷・幕府への出銭であるを問わず、その収取の額は別として、方式に相違があるとは考えられない。この場合、賦課が何を基礎としてなされたかといえ、鎌倉期作成の大田文、つまり図田帳であった。たとえば、

為内裏御要脚、重而国中平均段銭壹段別<sup>五十五文</sup>事、来八月廿日以前可有調進候、既被捐初月候上者、少無油断、田数与云、分銭と云、任図田帳之旨、则可被遂勘定状、如件、

丙子 康正二年七月廿三日

（豊饒）

直弘（花押）

（石合）

氏伝（花押）

永富三郎殿

大津留備後守殿（統編年大友史料四、141号・傍点筆者）

として、ここでも「任図田帳之旨」とされている。これが一般的でありかたであったことは、この他永禄八年十月における豊前国検使の任務について、

一、段銭之事、任往古之旨、堅可被遂催促之事、

（大分県史料(8)112号・傍点筆者）

とあり、他にも永禄十年前後、「任古帳之員数、従領主被申付」（大分県史料(10)79号）とあるによって推測される。いかに停滞的な九州とはいえ、こうした鎌倉期の土地事情が、室町戦国期の現実と隔りがあることは明らかであり、こうした体制下にあつて、土地からの年貢収取が不可能であつたことはいうまでもない。ただわずかに人を客体とする段銭の収取に留まらざるを得なかった理由がそこに

ある。またこの様に「図田帳」が賦課の基礎台帳とされていることは、人を対象としつつも、その賦課の最低単位が名であつたことを意味する。その具体的な収取方式については後述する。

段銭が大友氏の場合、右の様に豊後本国たると征服地たるを問わず、一応領国全般に普遍的に実施される建て前となっているのに対し、間別銭はいささかこれと事情を異にする。いうまでもなく間別銭は、屋敷の間口の長さを規準として人を客体として課する課役の一種である。こうした「一国平均」の間別銭は、その収取範囲は支配の本国である豊後一国に限定されており、これ以外の征服地に課されたことを示すものは管見に入らない。しかもその収取の名目は、豊後大分郡鎮座の豊後一宮由原八幡宮の造営を掲げており、これ以外の目的を挙げたことはなかった。

この由原八幡宮は豊前の宇佐八幡宮の分霊社であり、宇佐宮同様三十三年毎の式年造営を行なう慣習を有する。大友氏は鎌倉期からこれを崇敬し、南北朝以降これを氏神とした。そして室町、戦国期には一種の領国鎮守神としての性格を有するに至り、その造営は「守護殿之御役」（由原八幡文書143号）、つまり大友氏の任務とされていた。大友氏の「万雑条々」（統大友史料五、1381号）にも、

由原宮御造替之時、國中へ奉書を以、間別銭被仰付候趣之事、

とある。しかし「由原宮遷宮等次第記」（由原八幡文書143号）によると、その造営遷宮は現実には室町戦国期遅緩して、殆んど三十三年毎とはなっていない。それはともかく、史料的に確認される長禄三年から天正十二年にかけての六回にわたる間別銭の徴収が、由原宮造営を目的とするもののみであつたことはほぼ明らかである（表一参照）。永正四年三月二十五日、大友親治が豊後から間別銭を徴したその催促条々をみよう。

間別錢徴収取時	史 料	造 営 遷 宮	史 料
長祿 三 (1459)	永 弘 文 書	寛正四(1463)遷宮	由原八幡文書
永正 四 (1507)	安 部 文 書	左により実施か	—
永正十八(1521)	永 弘 文 書	左同年遷宮	由原八幡文書
天正 五 (1577)	由原八幡文書	左同年造営開始	同 上
天正 六 (1578)	同 上	なお未完成	同 上
天正十二(1584)	田 北 文 書	左の後造営遷宮か	同 上

表一 〔間別錢徴収と造営遷宮關係表〕

(花押) (大友親治)  
 就賀来社御造営之儀、任、旧記、国  
 中平均間別錢可有催促条々事、  
 一、間別錢五文定一間別之事、  
 一、至寺社者、由原宮中万寿寺  
 寺内計可除之事、  
 一、不謂権門高家催促之事、  
 一、催促使莅其所之上者家数之  
 事雖可為明鏡、若家主有聊  
 爾之儀者、云神慮之冥鑑、  
 云法度之憲法、可処罪科之  
 事、  
 一、所々催促之事、為其方分奉  
 行可副案内者之条、調催促  
 可渡社家事、  
 右守条々旨不可有聊爾之儀者  
 也、仍下知如件、  
 永正四年三月二十五日  
 (安部文書・傍点筆者)

とある。  
 まずこの条々をみて気付くのは、領国主大友親治自身が袖判を加  
 え、「権門高家」よりも敢て徴することを述べ、家主が懈怠する際  
 は厳科に処するとして、徴収にかなり強い姿勢を打ち出しているこ  
 とである。「権門高家」よりも徴すということは、間別錢の性格上  
 その収入源としては大きいものであったと判断される。

ついでここでも「国中平均」に催促するとあり、豊後一国を賦課  
 の対象としていることが分る。そしてこの賦課は「任旧記」すとな

る。さてこの「旧記」とは何を意味するものであろうか。先に段錢  
 徴収の際基礎とされた図田帳が、屋敷地を記す方式を採っていない  
 ことはいうまでもない。かりにこれが家屋の記載をする方式で記さ  
 れるものであったにせよ、その性格上家屋の変容は、土地とは比較  
 にならぬものであり、現実の意味をなさぬことはいうまでもない。  
 しかしこの条々に一間別五文の賦課基準を明示し、また「家主」か  
 ら嚴重に徴すると謳っていることは、正に各家間別にこれを徴した  
 ことを卒直に認めざるを得ないが、この際とてもやはり段錢徴収の  
 際と同様、図田帳が何らかの役割を果たすべく利用されたものであ  
 る。それは後述の様に、段錢が図田帳の名を単位としたと同様、こ  
 こでもやはり名ごとに間数を算出し、これに対して賦課している事  
 例を見出ことが出来るが、やはり図田帳がそうした意味で利用され  
 ていることが分るのである。この点段錢・間別錢同様であったわけ  
 である。

さてこうした段錢・間別錢の収取の衝に任ずるものとして、長祿  
 元年十一月には「筑後国段米奉行」なる者がみえ(筑後国水田庄・広  
 田庄史料集71ページ)、また豊後については国東郡段錢奉行・速見郡  
 段錢奉行(続大友史料267号)・(田染庄カ)段錢奉行(大分県史料(4)511号)  
 等々の奉行人がみられる。この下部機関について「万雑条々」(続大  
 友史料513号)に、

郷庄御段錢、御准田錢、御催促奉書、八月一日の日付ニ御嘉例ニ  
 公文所にて御右筆衆何<sup>モ</sup>罷出調申、宿老へ公文所持参候て判形被  
 申請方々へ被仰付候、奉書ニ書申候、当庄御准田錢、一反別何十  
 文通之事、如例年当毛加点札、寺社諸給人、不云古今免許、稱以  
 催促来十月中、可被遂勘定之由被仰出候、被得其意聊不可有緩之  
 儀候、恐々、緒方庄政所殿、宿老いくたりも候へ連署、右員数之

事、緒方庄御准田錢、一反別七十文通政所へ連署、荏隈郷准田九十文通<sup>検使へ、</sup>丹生庄同七十文通政所へ、大野庄同七十文通<sup>検使へ、</sup>都甲庄同五十文通<sup>検使へ、</sup>直入郷同七十文通<sup>政所へ（中略）</sup>是ハ政所以調進納候ハ、政所へ連署被遣候、検使にて調候ハ検使被着郡候之間、検使何かしと宛候、検使ハ兩人にて候、仕付たる衆、をよそさたまり申候、

とある。先の諸奉行人の他、政所及び検使等の諸役人の居たことを記している。この政所、検使については別に考察を加えたことがあり、<sup>(6)</sup>ここでは繰り返さない。ただ右の記事にみえる郷・村・庄等々の徴収単位が、ともかく形式においては「任図田帳之旨」とある催促の規定を正しく裏付けており、この図田帳の記載に依拠したものであることは明らかである。現実の収取方式について、大分郡高田庄の場合、

高田之庄間別調帳之事

- 一、門田名間数六百四十式間
- 一、別保名間数七百十八間
- 一、成松名間数五百三十七間

（中略）

- 一、藤島名間数千百十六間
- 一、種具名間数四百八十八間

以上

都合一間一分宛、間数七千百五十三間、銀子合而七百十五文三分定并懸出十二文目六分、何<sup>茂</sup>名々間数銘々小付有之、小役専道為先調申処如件、

天正五年丁丑十二月十五日

後藤上総入道

宗久（花押）

御政所  
参人々御中

（大分県史料(9)195号）

種具右近允  
鎮安（花押）  
種具中務少輔  
鎮生（花押）

とある。これによれば高田庄にあつては、間別錢が庄内の名單位に徴せられていることは勿論であるが、その収取については庄内の三名の名主が責任者となつてこれを徴し、高田庄政所に納付するという方式であつたことが分る。従つてこれら名内の家数及びその間数の算出と、これによる賦課額の決定は大友氏の遣した役人（政所・検使）には恐らくはなく、これら在地の名主の掌中にあつたとみられる。この場合徴税責任者の一人である種具名が、ここに示された間数では最も短い四百八十八間であるとされていることは決して偶然ではなく、その収取体制について、先の調帳の賦課額に「懸出」分が示されている点は幾分評価するとしても、全体的にその内容がいかなうなものであつたかを考えるうえで示唆的であるといわねばならない。

収取率については、段錢の場合段別五十文が、そして一方間別錢は間別五文が一般的であつた。<sup>(7)</sup>事情によつて増減があつた筈であり、先の天正五年の直轄領高田庄の場合、間別錢の徴収率は間別一分であり、通常の間別錢の徴収の実に五十分の一であつた。しかし直轄領のみ検地が実施をみ、年貢の徴収の行なわれたことを思えば、右のこののをもつて直ちに直轄領が優遇されていたとするのは当らず、年貢の徴収に伴なう軽減措置とみるべきであらう。

以上の様に大友氏の段錢徴収は、その実施の地域が一応領国全国に及んでいること、またその施行期間も、守護出錢をテコにして独自のものを遂行し出したという経過から分る様に、極めて長期に及

んだものということが出来る。これに対し間別銭は、臨時の由原八幡宮造営という唯一のものを目的とするという点に独自の性格を有する。このことは間別銭徴収を、種々の名目を掲げて毎年の恒常税へと拡充させ難いものとしていたといわねばならない。その点段銭は徴収の名目も多岐に亘っており、その点恒常税へと拡充発展させ易かったのではあるまいか。大友親著が速見郡山香郷政所野原対馬守に對して、

一、段別号准田其年之隨善惡、定員數可調事、(大分県史料11)204号)と述べているのは、このことを示唆するものといえよう。しかしなお現実には毎年の恒常税としてまで拡充されたことはなかった。この点に關して、由原宮造営の目的で段銭・間別銭共に徴せられた形跡もあるが(由原八幡宮文書181号)、このことは間別銭なるもの自体が、段銭の補足的な意味で創始されたものではないかとの推測をも持たしめる。

現実にかほど収取の貫徹が達成されたは、収取の建て前とは自ら別個の問題である。収取に際しての免除措置は、段銭・間別銭の双方を通じて共に著しいものがある。先の永正四年の間別銭催促にあつては、権門高家を問わず徴し、ただ由原宮領及び大友氏菩提寺たる万寿寺領のみを免ずとして一応首肯しうる。しかし天正五年国東郡から間別銭を徴した際にあつては、田原宗龜・志賀道輝・一万田宗慶・吉弘宗似・奈多宗達等重臣の所領からの徴収は免除されている(大分県史料9)193号)。大友宗麟の覚条々(天正十二年四月三日・大友史料2632号)にも、

一、近習其外召仕候人、於領地自然公事以下出来之時、動直被差遣検使取沙汰、従前々稀之子細候之条、向後穿鑿可為專一事、とあるのはそれを示す。さらに先の天正六年の速見郡間別銭徴収に

#### 大名領国の經濟に關する二・三の問題(外山)

ついては、全三七四九間中不納分は二六一間、つまり全体のおよそ七パーセントに達する事情であつた。何れも十分な貫徹を達していないことを示すものであろう。

以上大友氏下の段銭・間別銭の性格と、その収取の事情を検したわけである。

#### (Ⅱ) 雜公事その他

先に述べた段銭・間別銭の他、大友氏は散発的に雜公事を家臣に宛てて徴している。たとえば、

漆之実用所候之条、至三重郷・同宇目村并宇田枝、殊白谷申付候、為兩人奉行、堅固可調給候、聊不可有緩之儀候、恐々謹言、

九月十五日 義鑑(花押)

深田織部助殿

古庄五郎左衛門尉殿 (大分県史料12)479号)

とある。これは大友義鑑が深田・古庄兩人を奉行として、三重郷以下の地から漆の実を徴せしめたものである。或は、

土藏之材木、以切符申候、各急度預馳走候者可為祝着候、殊外急用候、各不可有油断候、恐々謹言、

壬十一月十八日

義鑑(花押)

帆足右衛門大夫殿

松木丹後守殿 (続編年大友史料9)259号)

(以下平井・古後・恵良・太田等五名略)

とある。これは同じく義鑑が土藏建築に要する材木を、その豊富な玖珠郡から求むべく、帆足氏以下の玖珠郡衆に徴したのである。

同様義鑑は国東郡の岐部氏に對し、府内に大智寺を建立するため

の木材を徴し(続編年大友史料9)368号)、さらに風呂薪を徴し(同前九

369号）、また地鉄をも徴している（大分県史料10243号）。さらに義鑑は速見郡大神村内の真那井衆中に対し舟誘及び漁網の整備を求めている（続編年大友史料9389408号）。また、

筑後河堅令法式爰元用所之時、鯉可預馳走候、委細猶豊饒大藏少輔可申候、恐々謹言、

二月五日

義鑑（花押）

草野太郎殿

（続編年大友史料9436号）

として、義鑑は筑後草野氏に、筑後川からその入用の際、鯉を馳走すべき様かねて命じていた。

家臣団の編成に伴ない、その領国も拡大され、これに伴ない各知行地より家臣が徴せられる公事は、或る程度固定化する方向にあったといえる。大友氏の「年中作法日記」（続大友史料51388号）によると、正月元旦に供用するかち、栗は大分郡津守村・大銅山の産であり、その地頭方役人の松崎左京亮が進上することされており、また陶物は大分郡荏隈郷から調すべきこととされていた。さらに「万雑条々」（同前51381号）によると、御番帖料紙は屋くら紙と称し、直入郡直入郷から調進すべきこととされていた。このうち荏隈郷及び直入郷は、共に大友氏直轄領であった（後述）。

しかしたとえば、

船造作為用所、方々材木之事所望候、仍別紙以注文申候、是者不可有公事候、為芳志奔走候者悦喜候、殊早々大望候、憑入候、恐々謹言、

（明応五年）

二月十六日

義右（花押）

（親幸）  
田北六郎殿

（続編年大友史料5217号・傍点筆者）

とある。これは大友義右が家臣田北六郎親幸に木材を求めたものであるが、この場合注目されることは、「公事」として徴するのではなく、あくまで「芳志」として提供を依頼するといふものであることである。こうした形式をとった理由は、或は公事たることを明示すれば、軍役免除等の措置を講ぜねばならぬ局面に立たされ、従ってそれを条件としないことを考慮したものであるかも知れない。しかし大友氏が、公事とは別に家臣その他よりの献上品に期待した例は少なくない。たとえば大友宗麟は、永禄八年ごろより博多商人島井宗室と交遊を深めたが、この間その著しい収集癖もあって、彼から端物・絵画・印籠・茶碗・酒等を進呈させた（島井文書）。また筑後山門郡鷹尾城主田尻親種は、その嫡子と共に天文十六年、豊後府内に義鑑を訪ねた。その目的は彼が嫡子に家督を譲与したことに對し、相続の安堵と、偏諱とを請うためであった。同年十月二十六日鷹尾を発し、翌十一月二十五日帰着するまでおよそ一ヶ月をこれに要した。この際彼等父子は、義鑑・義鎮及び年寄等に対し、まことに莫大な進物を呈していることが知られる。これを示せば、まず彼等は府内に到着すると義鑑への謁見に先立って、豊饒・入田・山下・斉藤・雄城氏等の年寄その他の要路に、太刀・銭その他を贈っている。たとえば、

太刀一腰、三百疋和銭	豊饒鑑述
太刀一腰、二百疋和銭宮七郎殿より	同 以上五くわん（貫）
黄金一まい	入田親廉
太刀一腰、五百疋	入田親廉
太刀一腰銀 島おり一端宮七郎殿より同	
太刀一腰 五百疋和銭	山下和泉守殿
太刀一腰銀 島織一端宮七郎殿より同	

太刀一腰 五百疋和錢 齊藤播磨守殿

太刀一腰銀 島織一端宮七郎殿より 同

太刀一腰 五百疋和錢 雄城若狹守殿

太刀一腰銀 島織一端宮七郎殿より 同

(田尻文書、以下同)

とある。いよいよ十一月三日、義鑑へ謁見を許されたが、この際彼に、

御太刀一腰金覆輪 御馬一疋栗毛

御太刀一腰金覆輪 島織二端宮七郎殿より

百疋くつわせん

を贈り、さらに翌四日には、

さめ一そく 入田親廉

太刀一腰 百疋 一万田彈正殿

馬一疋川原毛 山下和泉守殿

太刀一腰、二百疋 齊藤備後守殿

の通り贈物を呈し、こうして五日、六日また品を変えて、先に揭示したと同じ人物を含め、種々の者へ同様贈物を呈し、六日義鑑への謁見に際しては、

進上御太刀一腰金覆輪

御馬一疋川原毛

御太刀一腰金覆輪

ほっけん三端宮七郎殿より

といった品を呈している。またいよいよ目的の相続を安堵された七日には、その祝儀として義鑑及び義鎮に、それぞれ太刀の他、錢を五百疋と三百疋ずつ呈している。列挙すれば誠にきりのない莫大な贈呈品の数々であったことが分る。永年十二年に出された大友義長の条々(統編年大友史料六350号)に、

一、進物之類、無油断可被求之事、

とするのは、やはりこうした家臣から進物を求めることが、一つの政策として強く意図されていることを示している。

この場合、家臣から求めるものが公事によるものであるか、或は進物であるのかは微妙で、区分が容易でない場合が少なくない。しかしいってみれば、公事とは元来こうした人の人に対する献呈を制度化したものに過ぎず、本質的な相違はないと考えざるを得ない。

なおこの他、大友氏は領内に関を設け関錢等を徴している。たとえば大友氏直轄領である直入郡直入郷の代官であるとみられる志賀常陸介親泰は文明五年三月十八日、その管内から十二貫三百五十文の関錢を徴して上司とみられる倉成和泉守・久保大炊助に提出している(統編年大友史料四312号)。またさらに、

(段)カ

就肥後国豊田河登料取調之儀、辛勞之(段)カ感心候、倍堅固之儀肝要候、必追而一段可賀之旨、猶年寄共可申候、恐々謹言、

十一月三日

義鑑在判

惠良太郎次郎殿(統編年大友史料九48号)

とあり、義鑑は惠良太郎次郎から、肥後豊田からの河登料を徴せしめている。同所に関を設けていたことを示すものであろう。

また大友氏は交通整備のための点馬を行なっている。天正十年正月二十二日の大友義統の覚(大友史料二209号)に、

(公役)カ

一、□点馬、諸公事等之事、如前々可被励馳走、□(縦)カ地下人等

雖企内訴、曾而不可有許容事、

としているのはこれを示すものである。

【Ⅱ】貫高制と軍役

さて以上の段銭・間別銭その他の公事等による収取が、土地の貫高表示方式であるいわゆる貫高制と密接に関わるものであることはいうまでもない。そこで大友氏領国下における貫高制のありかたと、その収取体制との関わりを検討し、大友氏の支配体制を窺うこととしたい。

大友氏領国下における貫高方式採用の時期はかなり早い。管見によれば、それはすでに十四世紀の後半、康暦二年十二月八日の豊後国直入郡直入郷の給人注文(統編年大友史料2139号)においてすでに窺うことができる。いまこれを抄記すると、

直入郷〔 〕給人注文御恩帳

(中略)

一所 下飛田名半分

以上貳拾貫文

首藤次郎

(平田名内)カ

一所

〔 〕薬師寺入道分五貫文

三宅名新方久六郎跡内折立屋敷四貫文

同名小田原左衛門尉給分之内六貫文

市用名之内本方五貫文

以上貳拾貫文

古庄小四郎

一所

三宅名新方久六郎跡内けこや屋敷三貫文

同名小田原左衛門給分内拾貳貫五百文

柏原名新方之内四貫五百文

以上貳拾貫文

大塚隼人允

(中略)

一所

木原名之内七貫文

市用名本方之内八貫文

以上拾五貫文

熊谷左衛門三郎入道

一所

木原名之内拾貫文

市用名本方之内五貫文

以上拾五貫文

小原藤五

一所

木原名之内拾貫文

同名之内五貫文

以上拾五貫文

荊津新左衛門入道

(中略)

一所

埴田七郎跡半分拾貳貫伍百文

埴田原本方半分拾五貫

別給大背郷之内

埴田名之内・貳貫五百文

以上參拾貫文

古庄藤左衛門入道

一所

三宅名新方田口盛太郎入道跡之内九貫文

平田名關所分之内六貫文

以上拾五貫文

賀島彦三郎入道

一所

家中名別給中角

以上參拾貫文

古庄中務丞



(下略)

とある。まず以上の史料から分ることは、この貫高制の実施をみている直入郷は大友氏直轄領であり(後述)、この貫高給与は従って右の大友氏直轄家臣を対象としているということ。ついでその給与が十五貫文・二十貫文・三十貫文等々、五の倍数貫毎に極めて作為的になされているということが注目される。そしてその後も、こうした貫高制の採用されている地域は、主として右の直入郷の他、大分郡高田庄・大野郡緒方庄等の直轄領であり、これ以外に広く拡大実施されるのは、義鑑治世の天文期以降である。この場合の給与情況は、先の直入郷ほどに整然たるものではないとしても、その貫高は大むね整数によっている。従って右の直入郷における貫高制の実施のありかたは、その後の大友氏領国下の貫高制の最も基本的な事情を示しているといえる。

以上のことからこの貫高制は、大友氏の収取体制の維持と、極めて密接な関係を有するものであることが推測される。先に述べたように、大友氏の収取の基礎をなす賦課台帳が「図田帳」であり、それが鎌倉幕府の作成した文字通り「古帳」であるという、当時としては著しく非現実的な基礎資料に依拠していたのである。それ故大友氏としては、こうした矛盾克服の手段として、貫高制を先ず直轄領に実施したものであり、次いで給地一般に拡充実施することを企図したものと思われる。

貫高制が右のように、直轄家臣の給分において実施の先鞭がつけられていることは、それ自身まず主としてその軍役賦課を狙ったものであるとの推測を持たしめる。ただしこの点、これを基礎として、いかなる方式基準で軍役賦課をなしたかという点については、後北条氏等の場合等が史料的に極めて明確に指摘されるのと異り、遺憾ながら全く資料を欠いており、この点検証の便宜を得ることが

出来ない。

貫高制の実施意図が、主として右の点にあったとしても、ただ現実にはこれが必ずしも十分な展開をみず、一方においてなお面積による土地表示も行なわれていた。従って軍役賦課も、必ずしも貫高制に依拠せず、段銭、間別銭等の収取におけると同様、名・屋敷を単位として徴することも行なわれた。たとえば、

(花押) (宗連)

糸永右京亮・同四郎兵衛尉給地徳弘名之儀、陣夫無之段注進候歟、当陣堪忍難成之通、兩人佗言被申上候哉、被仰出候者、右之名田兩人之給分屋敷、五ヶ所二五人之陣夫申付、其外以餘田地、浮夫、返夫之儀被申付、御公役可被遂其節之段、被仰出候、(中略) 恐々謹言、

霜月六日

(奈多)  
恒基(花押)

(宗善)

広崎兵庫入道殿

(大分県史料(8)157号)

とある。この場合、大友氏は家臣奈多恒基を以て、糸永右京亮・同四郎兵衛尉に対し、その給地徳弘名から陣夫を徴した。しかるに陣夫が得られなかったため、代って兩人の屋敷五か所から二五人の陣夫を徴したのである。この他、他の名から浮夫・返夫を徴している。後者については不明であるが、前者は浮役夫、つまり賦課の対象を特に定めず、陣夫を徴したわけである。貫高制とこれに基づく軍役体制が、十分な確立展開をみていなかったことを示すものである。志賀親家注進状(続編年大友史料432号)によると、嘉吉二年大友親綱が肥後小国から豊後杵網へ打ち出て来た。当時杵網は親綱の敵地であり、ことに入田・一万田両氏という有力な敵の支配下であるため、何処からも人足(陣夫)が参集せず親綱は困窮していた。そこで志賀民部大輔親賀が、その所領松本名(直入郷か)から夫丸

(陣夫)を親綱へ提供した。これによって親綱は、由布院の戦、河の御陣・玖珠角牟礼城落去以後までもこれを召使い、返還しなかった。そこで親賀が連々と親綱に返還を願ひ出たところ、辛うじて彼等を帰還させられたとしている。ここでも松本名を単位に陣夫が徴せられているということ、陣夫が得難く、それだけに一旦得てからは、その出陣期間も定められる事なく、容易に帰還を許されなかった事情がうかがわれる。

また大友氏衰亡期の天正十九年当時、

日田郡

荒田下之畠除之、畠三反ヲ田一屯反ニメ

一、合千六百廿式町式反七畝廿式歩

式百町ニ夫丸屯人宛之事

天正十九年正月廿九日

(大友史料二43号)

とあり、ここでも貫高制はみられないばかりか、二百町につき陣夫を一人宛徴するという、驚ろくべき甘さで賦課が行なわれる事情に墮っている。大友氏の滅亡を示唆するものである。

なおまた軍役遂行に対しては、「検断不入」・「万難諸点役免許」等の措置を講ずる場合がみられた。たとえば、

其方事、以田原近江入道同心、至妙見岳長々在城辛勞感入候、仍為其賞田染庄之内知行分之事、万難諸点役令免許、殊永々可為検断不入候、此方用所之御者、直可申付候、為存知候、恐々謹言、

五月一日

義統在判

(鎮久)

上野左介殿

(大友史料二171号)

とある。大友義統は上野鎮久に対し、田原近江入道紹忍に同心して妙見城に勤番した軍労に対し、その田染庄内の所領について万難諸

点役免許・検断不入たることを申し渡したのである。大友氏の軍役は、こうした収取体制の免除とうらはらに成立していたのである。

注

(1)たとえば佐脇英智氏「後北条氏の税制改革」(日本歴史一六三号)・藤木久志氏「大名領国の経済構造」(日本経済史大系2中世)等は、その代表的なものといえよう。

(2)たとえば幕府は足利菊童丸の元服に際して、

御元服要脚豊後国段銭、早守事書之旨厳密相懸之、来六月中可致其沙汰之由所被仰下也、仍執達如件、

天文十五年二月廿三日

(飯尾)散位(花押)

(飯尾)大和守(花押)

(松田)前丹後守(花押)

(摂津)摂津守(花押)

大友修理大夫殿

(増訂編年大友史料一八303号)

として大友義鑑から豊後国段銭を徴している。

(3)これには種々の名目があったとみられるが、一例をあげれば、

京都に御下知観世大夫下向之条、為可加扶持至分国中用脚之儀申付候、其国各被申談別而御馳走可為祝着候、猶年寄共可申候、恐々謹言

八月廿日

義鎮(花押)

蒲池十郎殿

(蒲池文書)

とあり、大友義鎮が京都から観世大夫を豊後に招住せしめた際、その滞在費を分国からの段銭を以て支弁したことが分る。

(4)由原八幡は柞原八幡、或は賀来社とも称される。なお同宮に対する大友氏の信仰については、外山「大友氏の八幡信仰」(神道学47号)で詳論した。

(5)この点、天正十二年における城後田北氏所領からの間別銭徴収について、

天正十二年<sup>甲申</sup>城後拝領分間別銭一間一分通

十四間 城後三河守

五間 同右近大夫

三間 同新助

四間 同雅楽助

式間 同六郎

二間 工藤主計允

(下略) (増訂編年大友史料二六〇八号)

とあるのはこれを裏付けること勿論である。

(6)外山「大友氏権力の構造と機能」(佐世保高専紀要一号)

(7)統編年大友史料二五二号・同前五五号三二号その他由原八幡宮文書。

## 二、直轄領の性格と意義

### (I) 城領の問題

大名領国の収取方式が、先にみたように散発的、かつ臨時の段銭・間別銭・雑公事その他に依存する極めて不安定なものである以上、直轄領が大名経済にとって、勢い重要な役割を果たしているのではないかとの推定を持たしめる。そこで大友氏の直轄領について検討し、その経済上に占める位置と、性格とをみてみることにしたい。

最近大名領国の直轄領について、上杉・後北条氏を例として検討を加えられた藤木久志氏は、直轄領が基本的には「支城」単位に「城領」として存在したとし、その軍事体制との密接な関わりの中で評価せねばならぬことを指摘された。<sup>(1)</sup>この指摘は、従来戦国大名の直轄領を、近世大名下におけるその存在形態を基礎とし、莫然と

大名領国の経済に関する二・三の問題(外山)

その先蹤形態としてのみ意識理解しようとしていた従来のありかたに対して衝撃的な、興味ある指摘であったと思われる。しかしその体制が、個々の戦国大名にとって、果して一般的にしてかつ十分な展開をみていたものであったかという点について、私はいささか疑義なきを得ない。

まずこれには、戦国大名下の城について検討を加えることが前提とならねばならない。大名領国下の城には、或る意味で基本的に二つの類型のものがあったといえよう。その一つは、大名にとって公的性格の強い番城であり、他の一つは各領主(家臣)個々の、私的性格の強い城である。勿論両者区分のつけ難い場合も少なくないが、前者は主として征服地で獲得、或は構築したいわば直轄の城であって、これに家臣を勤番せしめて防衛に任ぜしめているわけである。藤木氏のいわれる「支城」とは、この場合、その理論からすれば恐らく前者であろう。

さて大友氏領国下であって、前者に相当する城は決して多いものではない。具体的には豊後以外の征服地の妙見城(豊前)・柑子岳城・宝満城・岩屋城(以上筑前)・南関城(肥後)等がこれに当る。そしてこの城主を城督と称し、大体年寄クラスの人物がこれに任ずる。<sup>(2)</sup>

さてこうした大友氏領国下であって、そうした番城単位に直轄領が存在した事例を全く見出し得ないわけではない。例えば大友氏の家臣高橋鑑種は、いささか史料価値に問題を含むが、「九州治乱記」によれば、

弘治五年夏、宝満・岩屋ハ高橋本城ナレハトテ、彼城ヲ賜リ、二千余町ノ領地ノ外、筑前五郡ヲ預リ、何事モ思フ儘ナリとあり、また一旦宗麟に叛し、のちこれに降伏してからは「薦野家譜」によると、

大友家より宥免を蒙り、宝満・岩谷の両城、二千余町の領地共に

悉く没収し、豊前企救郡にて纔の知行をぞ賜りけり、とある。また筑後の問注所統景は長岩城勤番に伴ない、大友義統から「長岩城料」として生葉郡内山北八十町を給せられている（大友史料二七一号）。また肥後方分として、南関城督を勤めていた小原鑑元は、弘治二年叛起したため大友氏に追討される。そしてこの追討の後、その知行地は各家臣に配分されている。

今度、不儀之仁成敗之刻、田北勘解由左衛門尉以一所、被碎手、被疵之条、忠貞感悦候、仍為其賞、肥後国玉名郡之内小原遠江入道跡、関四拾五町〔三町分之事、預置候、可有知行候、恐々謹言、

（弘治二年）十一月十九日

義鎮在判

とある。これらの配分状によって、逆に南関城督当時の鑑元の知行地を窺うことができるのである。それによると史料的に判明するその知行地は、およそ次の表二の様である。これによるとその知行地は、南関城のある肥後玉名郡に圧倒的に多く、確認される全知行地一二七町中、実に一二五町がこれに集中し、他は豊後国東郡伊美庄内に僅か二町を見出すに過ぎない。

知行先	知行高 (町)	出典 (号)
肥後国玉名郡 関	45	144
〃 〃 東郷西肥猪	21	146
〃 〃 伊倉内 (小島・浜分・北下)	21	121
〃 〃 白間野内 (坂下長田)	38	152 153
豊後国国東郡美庄内	2	145
合計	127	／

表二 〔肥後南関城督小原鑑元の知行表〕

※出典番号は増訂編年大友史料二の整理番号。

このうち伊美庄の地は藤木氏のいう「本地」であり、他が鑑元の南関城督に伴う城領であろう。しかし、先の高橋鑑種及び右の小原鑑元の城領についても分るように、この直轄の城の城督自身しばしは大名大友氏に叛している例が少なくないということ。しかもその追討後、これら城領が次の城督に継承知行させられることなく、謀叛人追討の軍勞を行なった者にその賞として少額ずつ配分知行せしめてこれを解消していることは、大友氏領国下にあつては、そうした直轄の城と共に、城領を設定維持する条件と体制が十分な展開をみていなかったことを示すものではあるまいか。ここに大友氏支配体制の限界が見出されるといねばならない。

## 〔Ⅰ〕直轄領の成立と分布

およそ大名にとって、その直轄領がその封建権力の直接的基礎をなし、その多少が権力の強弱を規定する上で、大きな要素をなすことはいうまでもない。大友氏にあつてもその領国制進展の過程で、直轄領の確保とその増大は、必須の条件であつたとみられる。

大友氏の場合、鎌倉時代以来守護・地頭として膨大な所領を有しており、これが室町・戦国期の直轄領を構成する際、最も基本的な要因となつたことは十分推測しうるところである。そうした意味で、貞治三年二月の大友氏時所領所職注進状（増訂編年大友史料八五号）、及び永徳三年七月十八日の大友親世所領所職注進状（同前八三五号）は、そうした大友氏直轄領の最も主要な前提となすものとして注目に値する。これらを参照しつつ、戦国期における大友氏の直轄領を史料的に検索すると、およそ次の表三の様になる。

表三「大友氏直轄領一覽表」

直轄領	史料年時	出典
豊後府内		
大分郡挾間村	享徳元、十二、二十七	続大史五 1381号
大分郡高田庄	年未詳四、二十七	続編大四 116 117号
笠和村	?	同四 259号
阿南庄	大永四、十二、十三	続大史五 1381号
植田庄	永正十三、十二、二十三	続編大七 161号
荏隈郷	?	同前六 369号
戸次庄松岡下野入道跡	永徳二、十一、七	続大史五 1381号
小津留	応永二十一、壬七、二十五	続編大二 150号
国東郡田原別符	応永三、七、二十二	同前三 62号
来縄郷	応永十六、十一、四	熊本県史料二 537頁
来浦村	永享七、十二、六	続編大三 43号
田染庄	文安三、十二、十一	大分県史料(10) 136号
国東郷半分	享祿五、八、二十六	続編大一 15号
安岐郷	年未詳三、二十三	同前七 357号
六郷夷山小墾原名	永正四、十二、十三	続大史一 20号
源六裁判地	年未詳十一、六	大分県史料(25) 68号
波多某跡	年未詳三、二十六	同前(10) 795号
速見郡山香郷	応永二十八、三、二十	同前(11) 204号
日出庄辻間村	年未詳十一、五	同前(11) 475号
大野郡大野庄	貞和二、五	編年大友史料
緒方庄	貞和三、六、十八	正和以後 744号
		続編大一 26号

大名領国の経済に関する二・三の問題(外山)

井田郷?	長祿二、二、三	同前四 149号
野津院	明応六、三、十一	同前五 253号
字目村	享祿一、十二、三	同前七 259号
直入郡直入郷	文明七、三、二十七	同前四 320号
海部郡白杵	年未詳六、一	同前八 293号
丹生庄	年未詳	続大史五 1381号
佐賀郷関	天文二十、九、二十	同前三 927号
津久見	天正十	耶蘇会士日本年報
豊前 久保庄	応永九、十二、十八	続編大二 363号
松井五町分	天正十一、九、十六	熊本県史二 353頁
某庄内神代拘分	年未詳五、三十	大分県史料(8) 421号
奥畑	長祿三、十、十二	同前(10) 150号
筑前 博多半分	年未詳	海東諸国記
志摩郡	年未詳十、二	続編大四 248号
筑後 生葉郡山北八十町	年未詳十、廿七	大友史料二 71号
肥後 豊田	年未詳十一、三	同前九 480号
肥後 玉名郡関四十五町	弘治二、十一、十九、その他	増訂編大二 144号
その他		その他

※出典略号は以下の通りである。続編大Ⅱ続編年大友史料、続大史Ⅱ続大友史料。

記号のうち、○印は大友親世所領所職注進状にもみえるもの。また△印は一部のみにこれにみえるものである。

これによるとまず全体として、直轄領は本国の豊後に最も多い。しかも豊国一國中では本拠のある府内、及びこれに近い大分郡に、ついで国東・大野・速見各郡の順に多く分布するという凡その傾向

が指摘される。この反面豊後以外の征服地は著しく少ない。この点城領なるものの十分な展開設定を考慮し、征服地に最も直轄領が多いとされる藤木氏とは、いささか理解を異にする。

以上の全般的傾向の指摘について、その直轄領の成因と性格について、まず第一に指摘しうることは、右の直轄領一覽表の記号欄に記すように、かつての守護領を継承したものが少なくないということである。但しこれは豊後一國についてであって、これ以外にあるのはこの傾向は当らない。

第二に主要都市・村等が含まれている。大友氏の本拠とした府内・臼杵・津久見<sup>(4)</sup>の他、筑前博多がこうした主要地域であることはいうまでもない。この他重要産業のみられる地域も加えられている。たとえば大分郡高田庄は鍛冶が存在し、刀剣その他の武器を生み出しており、同郡荏隈郷は陶器を、また直入郡直入郷が屋くら紙の産地であったことは別に触れる通りである。また肥後国豊田を直轄領としたが、これはここに関所を設けて河登料を徴する狙いをもつものであった(後述)。

第三に没収地が含まれている。これはさらに三種に大別できる。まず(a)懲罰によって没収され、直轄領とされたものがある。この場合その没収は、給地のみでなく私領にまで及んだ。たとえば、豊後国無動寺領、六郷夷山小墻原名田畠山野荒野等之事、(中略)右之領地者某重代相伝無相違私領也、而彼名田一切散在仕候之処、御公領ニ罷成候て永正肆年依致忠節真光寺以取次、御屋形義長様被成下御判御奉書候、(下略)

(年脱)  
永正肆十二月十三日

種貞

(大分県史料2568号)

とある。種貞某はその重代相伝の私領を公領へ没収されたが、真光

寺某の斡旋で大友義長から返還されたという。その返還の契機が義長に対する忠節にあったということ、その没収が私領に及んでいることなどから、懲罰による没収が行なわれたことを推測させる。

次に(b)断絶した家臣の給地を直轄領化した場合がある。たとえば田原親幸書状案(大分県史料4537号)に、

田染庄之内預御尋候所々事、 私父大夫入道、為彼政所成敗仕候時節、重安直重断絶候之間、彼跡事悉為御公領致点定候、(下略)

とある。さらにまた(c)係争地を直轄地として没収する場合がある。たとえば、

大添村成安主計殿給所五反三十之事、依有論人、公領ニ被召置候、(大分県史料10364号)

とあるのはこれを示す。

なおこうした収公に対しては、これを妨げる家臣の動きがあったことは当然であり、このため収公の際、特に近郊の領主の協力が求められた。たとえば、

松井五町分之事、為料所召置候、為彼調高山右近允・斎藤大和入道差遣候、兼日如申候、暫宿之儀鎮綱領内被申付、在村中別而可被添心事肝要候、殊安心院牢人其堺江以隠住、狼籍之企無止事候由候、不及是非候、方角衆被申合、以心懸可計果事頼存候、猶兩人申合候、恐々謹言

(天正十一年)  
九月十六日

義統(花押)

(鎮綱)

佐田弾正忠殿

(熊本県史、史料編二353ページ)

とあり、松井五町分を直轄領として収公するに際し、高山・斎藤の両氏を遵行使として派遣するについて、安心院牢人の妨害等の懸念

があるによって、大友義統は佐田氏の協力を求めているのである。この他にも、たとえば被多野氏の跡を収公するに際し、田原親宏・親貫親子の協力を求めている（大分県史料1079号）などからすれば、相当の抵抗があったらしい。従って収公の際、場合によっては、それらの領主の諒解を得る必要があった。国東郡田染庄内八枝二段の収公について、大友氏は田原親幸に事前に諒解工作を行なっている（大分県史料4153号）。恐らくその収公地は、田原氏被官の所領であり、このためその主君たる田原氏の諒解を必要としたものである。

#### 〔Ⅱ〕直轄領の構造とこれよりの収取

大名直轄領については、広義に公領（大分県史料2568号）と称する。公領はさらに、給分と蔵入（倉納・直納・直務・料所）<sup>(5)</sup>に分たれる。給分が大名の直轄家臣の給地であり、蔵入が大名の純粋な個人所得であることはいまでもない。

大友氏の場合もまた、例外なくこの方式が採られていたことは勿論である。両者の存在形態についてみると、たとえば豊後大分郡挾間村（統編年大友史料4116号）・速見郡日出庄辻間村（同前七221号）は共に料所とみえ、一円蔵入であることを示しているが、一方両者混在した場合もある。たとえば直入郡直入郷の、先に提示した給人注文の中に、

一所 泉名新方之内ひたきの屋敷

以上拾貫文<sup>此内五貫給分  
残五貫文ハ御料所としてあつる</sup>

木原左衛門四郎入道

とある。この場合、一応直轄家臣木原左衛門四郎入道分として、泉名内に拾貫文の地を給するとしながら、実際はこのうちの半分五貫

大名領国の経済に関する二・三の問題（外山）

文を蔵入とし、残る半分が彼の給分であったに過ぎない。このことは、直轄家臣の給地の中にまで蔵入地を設定するほど、大友氏がその増加を計ったとはみるべきでなく、逆に多くの蔵入地が、こうした給地の中に僅かずつ設定されたに過ぎなかったことを意味する。

このことは大友親治も、

直納と申事不可然候、（統編年大友史料六14号）

と述べ、また大友義統もまた嫡子義延に対して、

蔵納所、同国東郷配当堅可有停止之事、（統大友史料四1248号の2）

と述べていることから窺われる。つまり大名大友氏は、自己の蔵入地増大による個人所得の増大より、むしろ直轄家臣の増大による軍事力の強化に主眼を置いていたとみられる。従って大名直轄領の増大は、直ちにその蔵入の増大による個人所得の増大を意味するものではなかった。これについて、戦国期わが国に來朝したイエズス会の巡察使アレキサンドロ・ワリニアノは、

屋形はその国を国守の領地として分配し、国守はまた自分の土地を他の殿、すなわち小領主に分配する。彼等は更にその領地を自らの支配下にある親族、兵士、使用人、農夫に分配し、（中略）このことから諸領主は、大侯であってもはなはだ貧困であるという結果が生じる。（アレキサンドロ・ワリニアノ著、松田毅一、佐久間正編訳「日本巡察記」二九〇ページ）

と述べているのは、この間の事情を鋭く看破したもののといえよう。

戦国大名化を目前にひかえた大友親治は、年寄等に対して、

世帯不弁之儀、如何被申談候哉、はや二ヶ月及び、飢にのそみ候事、前代未聞、不及申候、これハ我々か恥辱と可申候哉、各いるかせと申へく候哉、失面目たる子細候、（前後略・統編年大友史料六24号）

と述べているが、それはこうした事情を考慮せねば、到底理解は困

難であろう。

直轄領内にあっても、段銭・間別銭及びその他の公事、並びに陣夫が徴せられたことはいうまでもない。この他さらに直轄領内であっても、年貢の徴収もみられたことは、他の大名領国の例などからしても十分察せられる。ただ大友氏直轄領の場合、そうした年貢徴収に関する史料を全く欠いており、いわんやその徴収率等については一層明らかでない。

ただ年貢徴収の前提をなす検地については、わずかに大分郡高田庄徳丸名扇之内徳丸丹後守持分に関する天文十五年五月（大分県史料<sup>(9)</sup><sub>475</sub>）のもの、またさらに海部郡佐賀郷関二十五貫文に関する天文二十二年九月（同前<sup>(10)</sup><sub>262</sub>）のものがみられる。なお豊後以外については江戸時代、筑前の具原益軒が著わした「筑前国統風土記」に弘治三年、筑前国竈門山神社領に対し、宗麟が検地を企て、同社座主浄戒の愁訴にも拘わらず「宗麟終に許されず」、有智山・小谷・中堂・原の各所に対してこれを強行したとある。しかし史料価値に問題があり、裏付けるべきものも見られず俄かに信じ難い。天正二年八月吉日における大友氏家臣元重鎮頼の置文にも、御給主検見なども被仰候とも、一同申談不可有同心、（中略）相構而可有愁訴之候、（元重実氏文書）

とあり、こうした検地に対する頑強な抵抗があつて容易に実施し難かつた。直轄領以外では先ず殆ど不可能であつたとみられる。従つて先の直轄領内の検地も、右の様に散発的かつ部分的なものであり、総検地等ではなかつた。先に直轄領大分郡高田庄の間別銭収取率が、直轄領以外のそれより著しく少ないことを明らかにしたが、それは先述の様にこれからの年貢徴収が行なわれたことに對する減免措置であらう。だが直轄領の検地において、この程度の施行状況

であるところからすれば、これよりの年貢収取体制は未だ十分な整備を遂げてはいなかつたと考えざるを得ない。

注

(1) 藤木久志氏前掲稿及び、「上杉氏知行制の構造的特質」（史学雑誌六九編一二号）。

(2) 外山「大友氏権力の構造と機能」（前掲）なお城督については、田原紹忍の妙見城督（立花家蔵大友文書）その他の例がある。

(3) また問注所統景に対して義統は天正十一年、

其表立柄銘々示給候、早速越後入道雖可差帰候、爰元出勢之様躰、以儀定之上可令入魂存、于今抑留候、然者衆評相調候之条、帰城之儀申候、毎事無油断才覚簡要候、（中略）弥堅固之覚悟頼存候、仍而腹当一領替毛、甲一同毛進之候、着用専一候、殊為、粮、料、銀、子、五、十、疋、目、先、以、頭、寸、志、計、候、猶宗傑可申候、恐々謹言、（戸次）

三月十六日

義統在判

問注所刑部大輔殿

（大友史料二二三号、傍点筆者）

とあり、その長岩城勤務番に対して粮料が送られているわけである。しかしこれは長岩城に附随して設定された城領（生葉郡山北八十町）よりの収取によるものではないと思われる。その意味では城領は十分な機能を果していたとは思われない。

(4) 大友義鎮は弘治二・三年の頃から臼杵に築城し、永禄五年以降これに常住し、さらに天正十年以降家督義統から与えられた津久見の地に隠棲したが、これらの点については近く、稿を改めて論ずる予定である。

(5) 大分県史料(9) 194号・同(25) 95号・統編年大友史料七 221号・熊本県史料史料編二 353号その他。

### 三、市場統制と産業保護の問題

後進的な大友氏領国にあつても、府内にはノコギリ町・小物座町



等<sup>(1)</sup>の他、上市町等の町があり、市場の開設もほぼ窺うことができる。豊後以外では、博多への往還路に当る豊前路筋が比較的商業活動がみられ、宇佐郡の四日市・安心院等にそれぞれ市が確認される。

安心院市について、

安心院市之事、従前々日限無相違、来月朔日ヨリ申触、可被立事肝要候、為存知候、恐々謹言、

(年月日を欠ぐ)

富来作右衛門尉

鎮泰(花押)

田吹与三左衛門尉

鎮景(花押)

(折返し端ウハ書)  
「山上老岐守殿

大橋右近殿

(大分県史料(8)130号)

とある。この場合、連署した書状の発給者は共に豊後の出身者であり、しかも大友義統と同じく名乗に鎮を用いていることからすれば、大友氏の家臣で、恐らく同地の検使又は政所であったと思われる。宛先の山上氏は、この場合、市主または市目代であったと思われる(大分県史料(8)132 133号)、また大橋氏もほぼ同様の地位にあったものとみられる。さてこの史料によって分ることは、市場開設・営業権は最終的には大友氏が掌握しており、この許可を得て市主(或は市目代)の山上・大橋の両氏がこれを開設することとなる。従ってこの山上・大橋両氏は、恐らくこの市場の管理権を有する程度に止まるものであろう。そして大友氏は、この市場の開設・営業免許に對する徴税に當った筈である。

ではこの場合、市は大友氏にとっていかなる機能を果し、またこの市主(或は市目代)たる山上・大橋両氏は、現地でいかなる役割を果しているか。この点についてさらにつつ込んでみるため、同郡

四日市の市場の例を通じて検討してみよう。

四日市にあっては四日市切寄衆中(大友史料(15)1号)、或は渡辺寄合中(同<sup>603</sup>号)と称される渡辺氏一族による衆中(寄合中)が存在する。まず衆中が中小武士の組織であることはいうまでもないが、大友氏の領国下にあつては、特に寄合中とも別に称されている。切寄とは簡単な城塞、砦の意である。<sup>(2)</sup>従つて四日市切寄とは、こうした大友氏の設けた砦の下に市場が開設されていることを示すものである。このことは大友氏の軍事体制と、経済体制とが、極めて緊密な關係にあつたことを明瞭に示すものである。

戦国期この寄合中には、渡辺石見守統忠・同加賀守・同三郎右衛門尉・同兵庫助・同市左衛門・同老岐守(大分県史料(8)319号)・同新右衛門・同縫殿助・同惣五郎(同前(1)218 328 333号)等の者がみえる。この様に渡辺寄合中は、渡辺氏一族のみの十二・三名程度で構成されているが、さらにその各郎従をも加えればさらに大きな集団となる。さてこの寄合中の中では、冒頭の渡辺石見守統忠がやや指導的地位にあつたらしい。それはまず「宇佐郡三十六人衆」に名を連ねるのは、この寄合中のうち彼のみであること(同前(8)235号)、また某所における同寄合中の軍功に對する大友義統の感状は、彼に宛てて発給されていること(同前(8)305号)などからも推測される。そこでこうした渡辺寄合中の軍事面の他、経済的側面についてさらにみるため、次の史料を示そう。

(a) 別而忠意之次第度々申出候、者、当切寄商売人諸方往反之刻、諸儀、従前々免許之趣、今以無相違候、為存、知候、恐々謹言、

天正十二年

十一月廿八日

義統在判

四日市切寄中 (大分県史料(2)306号)

(b) (花押) (義統)

四日市

町済物 九百文定

以上

拾月廿八日

渡辺石見守

統忠(花押)

さてこの(a)(b)二史料のうち、まず(a)によって分ることは、この四日市市場をめぐって存在する商人が、渡辺寄合中の何らかの統制管理下にあったということが分る。しかもこの商人等が公事の免除を受けていることは、彼等が渡辺寄合中の軍事的活動に対して何らかの寄与をなしたとみられ、このことから免除措置が行なわれたものであると推定される。

次に(b)史料は、要するに四日市からの町済物として九百文とする旨を規定したものである。この場合、先の渡辺石見守統忠が、やはり町済物の徴収と大友氏への納付の責任者であることを示すものとみられる。従って渡辺石見守は、ここでも先の安心院市における市主(又は市目代)山上氏の様な地位にあったと推測される。つまり渡辺寄合中の中やや指導的立場にある彼は、同時にこの市場の管理徴税権等をも有する事情にあったと思われるのである。ここで大友氏が収取をはかる銭九百文は、町済物とはいえず、結局は大友氏のこの四日市市場の開設及び営業免許の税に他ならない。そして市場はこの際、大友氏にとって銭貨収取の場として機能していることはいうまでもない。

次に諸産業に対する大友氏の政策についてみてみたい。大友家文書録(大友史料二370-384ページ)によると、天正十九年秀吉が朝鮮侵

略の意図を以て軍を徴したが、この際その意を受けた義統は、永富右衛門尉鎮並・古庄喜右衛門尉の兩人にその軍装を監せしめた。越えて文禄元年正月、すでに古庄氏は遠征軍の中に編入させられていたため、義統は専ら永富氏に遠征軍の兵具を整えることを命じた。よって永富氏は同月二十八日府内を出て、国中の諸工を招き、これらとその製造計画を練った。そして三月五日を期して大友軍が朝鮮に向けて出発するため、これに間に合わすべく製造すべき兵具の注文を記し、二月四日諸工人等とその製造を命じたという。史料価値にやや難点があり、大友氏の出發を一か月後に控えて、永富氏の職人等に対する発注が意外に遷延遅滞しているなど問題を含んでいる。しかし若しこの記事の大筋を認めるとすれば、大友氏は単なる公事によって期待し得ぬ高度の技術を要する兵器その他の製作については、かねて領国内の職人を、その需要の際常にこれに応ぜしめる態勢を或る程度整えていたとみられる。たとえば大友義統は、その直轄領の一つである大分郡高田庄の鍛冶仲間美作某に対して、

(袖判) (義統)

一字之事、統行遣之もの也、仍如件、

天正二年壬十一月廿九日

仲間美作とのへ(大友史料二11号)

として、偏諱を与え統行と名乗らしめている。職人の各々統轄的地位にある者を、その直轄家臣として、特別な庇護の下に置いていたらしい事情を窺うことができる。大友家文書録(大友史料一106ページ)によると、義鎮は渡辺某に鉄砲の製造法を南蛮人から習得せしめた。以後同氏は、その技術を以て業としたとある。信憑性に富んだことといえよう。

同様大友氏の「当家年中作法日記」(続大友史料五1388号)による

と、正月元旦の儀式に先立って、歳末までのうちに大友氏が謁見を許した者の中に、やはり諸職人が含まれている。その中には鍛冶番匠・たくみ御作・桶結（御作）・ぬしみつくり等々の者があり、謁見も場合によっては、館の縁まで上ることを許されたところ。特別に過分の厚遇を受けていたことが分る。

では大友氏はこれら職人を、具体的にどの様に保護育成していたのかという点になると、これを示す積極的の徴証を認め難い。その反面先述の様に、家臣から需要の品の進呈を求める史料を豊富に遺している。このことは大友氏が、領国内の産物を単に利用したに止まり、産業の保護育成の策に極めて乏しいことを意味するものではあるまいか。大友氏下において商業史料が著しく少ないのも、こうした事情と無関係ではないと思われる。極めて限られた史料であるが、大友氏年寄であった重臣朽網鑑康（宗歴）が天正五年十二月十二日、その子左近大夫鎮則に与えた条々事書（統大友史料四<sup>1219</sup>号）に、

一、牧之事、従往古当所名物之様申候之条、何とそ再興肝要候、縦如先代雖不事成候、駒取立儀無怠慢之様可被申付事、とある。朽網氏の本拠である朽網郷が、かつて牧場として著名であったが当時衰亡していること、そしてこれを鑑康がその子息鎮則に、先代ほどの繁栄は期待しえぬとしても、ともかく復興に努力するように申し渡しているのである。ここにおいて大友氏の政策は全く認めることが出来ず、単に放置されており、ただ朽網鑑康独自の着想として復興が企図されていることが分る。これをみると、大友氏は単に産業上の問題のみに止まらず、軍事体制整備の側面においても、その政策において著しく欠くところのあったことを推定せしめるといわねばならない。

注

(1) イエズ会士日本通信下所収。ただしその絵図には「右豊後府内大友氏時代古図」とあり、史料価値にいささか問題を残すが、かなりの信憑性がある。

(2) 外山「大友氏の軍事組織について」九州史学二八号

## まとめ

以上豊後大友氏を例として、その経済構造を収取体制、直轄領、市場・産業対策等の各側面からみてみたわけである。

これらを通じていえることは、まずその収取体制は、段銭・間別銭を軸として一応成立しているものの、現実には十分に貫徹してはおらず、家臣の進物に期待する面すら認められる。また直轄領も、自らの蔵入を抑えて給分を増し、直轄家臣の成立に汲々たる事情であった。さらに産業に対しても、これを保護育成するより、むしろこれを吸収利用するに留まるものでしかなかった。

以上の事情から、結局大友氏が近世大名へと推移生存し得ず、秀吉によって改易される歴史的必然性が見出されると思われる。